

キリストのご生涯は、主に新約聖書の福音書に描かれています。しかし、そこに描き出される歴史のイエスのお姿は、伝記作家が描く偉大な人物の生涯とは大きく異なっています。イエスという名のナザレ人は、その幼少年時代、青年時代についても、かれの家族や受けた教育についても、わずかな出来事を除いてほとんど何も記されていません。

福音書が描き出すキリストのご生涯は、キリストの死と復活という生涯の最後の場面に集中しています。そこには、福音書記者とそれ以前の伝承の担い手たちの関心が、キリストの十字架における苦難と死、そして復活と高挙という出来事に向けられており、その出来事にいたるキリストの生涯が、前史として付加されているにすぎないと見ることもできます。

キリストの死と復活、高挙が、初代のクリスチャンたちにとって重要であった理由は、そこに人間の救済の使信があると考えられたからです。キリストとは、偉大な教師や道德家、革命家ではなく、私たちの罪を赦し、罪の支配から私たちを贖う方であると信じられていたからです。

マルコによる福音書は、冒頭1章1節で、「神の子イエス・キリストの福音の初め」と述べて、主のご生涯を描き始めます。またヨハネによる福音書は、1章29節で、洗礼者ヨハネがキリストを指して、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである」と語った言葉を紹介しています。

新約聖書における主イエス・キリストの姿は、前回ご紹介した最初期の口頭伝承（Iコリント15章3節以下）が記すように、「キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと・・・」という最初期のクリスチャンたちのキリストの理解を映し出しています。

キリストは、単なる人ではなくて、神であられた、そして洗礼者ヨハネよりも先に存在し、神と共にありながら、受肉して、人となられた方と理解されました。後に、キリスト教会は、神とキリストの関係を「同質（ホモウシオス）」と言い表すようになり、451年のカルケドン信条では、主イエス・キリストを「真の神であり、真の人である」と告白するようになります。

このようなキリストの理解は、新約聖書の諸文書成立後すぐに確立したわけではなく、2～4世紀にかけて、キリストを説明する試行錯誤の末に教会が共有するようになったものです。この時代には、様々な「異なる教え」が出てきて、後に異端として排斥されます。

草創期のクリスチャンたちは、2世紀半ばまでに成立した新約聖書諸文書に基づいて、キリストのご生涯がどのようなものであったかを確信するようになります。彼らは、ヨハネによる福音書1章1節「初めに言（ロゴス）があった。言は神と共にあった」が描き出す永遠のロゴスとしてのイエス・キリストが、処女マリアから生まれて、人となられた出来事を、神の御子の受肉の出来事としてとられ、受肉して人となられながら、神としての本質を失ったり、減じたりすることのない救いの秘義であると理解するようになります。

教会は、ヨハネによる福音書1章4節の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という聖書自身の言葉によって、聖書全体を理解し、解釈するようになります。

福音書が描くキリストは、永遠から永遠に、昨日も今日も変わらない神の御子が肉をとられた姿です。ヘブライ人への手紙1章1～5節を読むと、神は御子によって天地創造を行い、「御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになります」と書いています。ここでも、キリストは、単なる人ではなく、罪を清める方、高挙されて神の右に座している方として描かれています。

死んで葬られた後、復活し、神の右に高挙された方が、12人の弟子たちと地上の生涯をともにし、病人を癒し、神の国の福音を宣べ伝えられたのです。このキリストが、礼拝の説教で紹介されていることは言うまでもありません。